



Nagoya City University Academic Repository

学位の種類	博士（人間文化）
報告番号	甲第1588号
学位記番号	第26号
氏名	松野 充貴
授与年月日	平成 29年 3月 24日
学位論文の題名	フーコーにおける歴史的批判
論文審査担当者	主査： 伊藤 恭彦 副査： 別所 良美, 菊地 夏野

ミシェル・フーコーの思想は様々な観点から考察されてきた。紋切型の解釈は断絶説がある。断絶説とはフーコーの試みを三分割し、『狂気の歴史』(1961)から『知の考古学』(1969)までの知についての探求を前期とし、『監獄の誕生』(1975)と『性の歴史 I 知への意志』(1976)を権力の試みを中期と位置づけ、『性の歴史 II 快楽の活用』(1984)および『性の歴史 III 自己への配慮』(1984)の主体性についての考察は後期に分類される。そして、前期、中期、後期の関係は断絶が強調されてきた。また、考古学と系譜学という方法論の転換も断絶説を強調することとなった。それゆえ、それぞれの時期のフーコーについての研究は多くあるのだが、統一的な視座の下でフーコーの試みを探求するものはほとんどない。それに対し、本研究はフーコーの試みをカント的な意味での「批判」という観点から明らかにした。

序章において、フーコーのカント論「啓蒙とは何か」について論じ、フーコーが自らの試みを「批判」の歴史化と位置付けていることを確認した。また、フーコーが「生命——経験と科学」において展開しているエピステモロジー(フランス科学認識論)に着目し、彼らはフーコーに先立って批判の歴史化という試みを行っていることを明らかにした。つまり、批判の歴史化という試みはフーコーに独創的なものではなく、フランスの哲学の伝統なのである。しかし、エピステモロジーの探求は科学を通じた歴史的批判であるのに対し、フーコーの試みは言説についての批判であり、両者は重なりつつずれているのだ。

第一章において、1961年のフーコーの博士副論文『カントの人間学』を詳細に解釈した。フーコーはこの著作のなかで『人間学』に焦点を当て、『人間学』のなかに第一批判の構造が反復されていることを見出していた。そして、『人間学』においては言語に特権的な地位が付与されており、カントは言語を通して経験的綜合の形式を探求しているとフーコーが解釈していることを明らかにした。したがって、フーコーは言説を通じた批判の可能性を1961年のカント解釈の中で見出していたのである。

第二章では『臨床医学の誕生』を取り上げ、フーコーの批判は批判の歴史化と言語を通じた批判の総合、すなわち言説的-歴史的批判であることを明らかにした。フーコーは『臨床医学の誕生』を通して批判の三項構造を

探求しているということを論じた。

第三章では『言葉と物』の第一部を取り上げた。ここでは、フーコーの文学論に着目し、「フィクション」とは批判の認識論の構造であることを明らかにした。フィクションという概念を導入することによってフーコーは言説の内部に感性の機能を見出すことができたのである。これらの解釈を通して、フーコーの試みはあたかも言説一元論かのように映るが、そこには批判の三項構造があることを明らかにすることができた。

第四章では『言葉ともの』の第二部の「人間」の解釈および『知の考古学』を中心に考古学とはいかなるものなのかを明らかにした。本研究では、『カントの人間学』におけるカント哲学とカントと同時代の人間学者の論述に着目し、そこから『言葉と物』の「人間」の議論を考察した。従来のカント解釈ではフーコーは近代を「人間学的眠り」に誘った主犯としてカントを断罪したとされてきたが、『カントの人間学』におけるフーコーの議論から考察した結果、フーコーはむしろカントに忠実であったからこそ、近代を批判したということが明らかとなった。また、第四章では『言葉と物』の第十章において論じられる構造主義、精神分析の試みをカントの批判と対比してその特徴を明らかにすることで、「人間」とそれらの思考の差異を考察し、その観点から、「考古学」とはいかなる思考であるのかを論じた。これまでの議論から考古学とは認識論であり、それはカントの批判の構造をモデルとした探求であることを明らかとなった。

第五章では『監獄の誕生』を中心にフーコーの権力論を考察した。フーコーは戦略と戦術という観点から権力論を考察しており、それを権力の技術論と呼んでいる。本研究では、フーコーにおける技術の位置づけはバシユラールの科学哲学における技術論とアナロジーの関係にあるのではないかという仮説を立て、その視点からフーコーの権力論を解釈した。その結果、フーコーが権力論において探求していたのは客体の生成プロセスであることを明らかにした。また、フーコーは権力論において真理と権力の関係を論じており、このことを戦略-戦術の観点から考察した。その結果、真理が戦略の次元に属し、知が戦術の次元に属しているということが明らかとなった。また、戦略-戦術の観点から(真理-知)、『監獄の誕生』の認識論

を考察することで、『監獄の誕生』は客体についての真理の生成プロセスの探求であることが明らかとなった。以上の考察の結果、考古学から系譜学への移行は客体の経験的総合の形式の探求から客体が生産されるプロセスの探求への移行であると結論づけることができた。